

陶器市へ行こう

読谷山焼陶器市

開催時期 毎年12月の第3金曜日～日曜日
 開催場所 読谷山窯 窯場、読谷山北窯 窯場
 問い合わせ 098-958-4468 (読谷山窯共同売店)
 098-958-6488 (北窯売店)

読谷やちむん市

開催時期 毎年2月の最終土曜日、日曜日
 開催場所 JA読谷ゆんた市場駐車場
 問い合わせ 098-958-1020
 (読谷村共同販売センター)



人間国宝・金城次郎氏の作陶風景 (読谷村提供)

人間国宝・金城次郎

生き生きとした魚文のヤチムンで知られる金城次郎。那覇市に生まれ、幼少より窯場に入りするようになり、二十歳になる頃には一人前の陶工として活躍します。種類や焼き上げる状況に左右される沖縄の土に寄り添うように、職人としてひたむきに作陶を続けました。



線彫双魚文大皿 (1963年 金城次郎 作 / 那覇市立壺屋焼物博物館 蔵)

わたしたちの暮らしに根付く沖縄の焼物、やちむん。ぽってりと厚く、自分で力強い絵付けの器や壺などは沖縄の土産物としても人気が高く、最近では県内で開催される陶器市で、多くの観光客の姿を見かけるようになっています。

沖縄の焼物の始まりはおおよそ6600年前に作られた土器。九州の影響も受けたとされますが、宮古・八重山では異なる土器も見つかっています。1616年に朝鮮人陶工の一六、一官、三官が来琉し、湧田窯(那覇市泉崎)で陶器生産の技術を伝授し、現在のやちむんの基礎が築かれます。その後、民藝運動からも高い評価を受けますが、県外産陶磁器に市場を圧迫されるなど、苦しい時代も過ごします。戦後は壺屋と並び、新たな窯場となった読谷村、そして県内各地で様々なやちむんが作られるようになります。

暮らしに寄り添うやちむん

各地にあった沖縄の古窯

現存する壺屋窯のほかにも、沖縄本島や離島の各地に窯場があったことが歴史書や発掘調査などでわかっています。これらの窯では、東南アジアや中国、朝鮮の焼物の影響を受けながら壺、甕、碗、徳利、皿、急須、厨子など沖縄独自の焼物が作られていたようです。



歴史と変遷

沖縄文化の足跡をたどる

うちな〜のルーツを探れ!

テーマ やちむん

協力・写真提供 / 那覇市立壺屋焼物博物館
 参考文献 / 「現代沖縄の歩み」常設展ガイドブック 那覇市立壺屋焼物博物館
 「沖縄の陶器」照屋善義
 「やちむんの大百科」第3巻 九州・沖縄編 潮香る南国のやちむん / 株式会社ぎょうせい

点在する窯場を壺屋に統合

尚貞王時代、王府の指導のもと三窯場が現在の那覇市壺屋に統合されました。首里と那覇の中間地点にある壺屋は、輸送に適していたこと、傾斜地が多く窯の構築に最適であったこと、水や土などの材料に恵まれていたことなどの理由から陶業地として選ばれたようです。

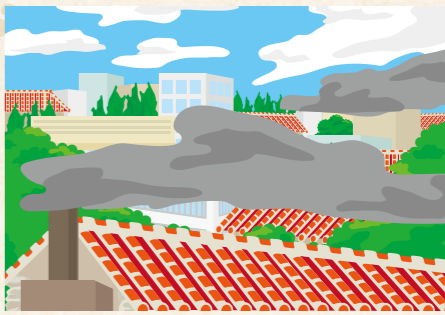


給釉碗 (20世紀 壺屋焼 / 那覇市立壺屋焼物博物館 蔵)



読谷村に新たな窯場を形成

終戦後、壺屋のまちが徐々に復興し、周辺地域の都市化が進むと、登り窯から出る煙が公害として問題視されるようになりました。ガス窯に切り替える陶工もいる中、昔ながらの方法にこだわり場所を求めて読谷村へ移る者もいました。のちに人間国宝となる金城次郎もその1人でした。



多様化する沖縄の焼物

沖縄の工芸の保護や振興を目的に沖縄県立芸術大学が開学。基礎を学びつつ、沖縄の古陶を意識したり、独自の作品作りに邁進する若者がここから巣立ち、県内に工房を構えています。また、現在は県外や海外からも作り手が沖縄に移り住み、多種多様な焼物を作陶しています。



マグカップ (2015年 金城有美子 作・蔵) 1991年 沖縄県立芸大卒



銀彩壺 (2015年 壺崎幸二 作・蔵) 1990年 沖縄県立芸大卒



荒焼 (壺屋焼 / 那覇市立壺屋焼物博物館 蔵)



上焼 (壺屋焼 / 那覇市立壺屋焼物博物館 蔵)

コラム

アラ ヤチ ジョー ヤチ 荒焼と上焼

沖縄の焼物を牽引してきた壺屋焼は、大きく荒焼と上焼に分けられます。荒焼は、釉薬(うわぐすり)をかけない陶器や、泥釉・マンガン釉をかけた陶器などを指し、約1,120°Cで焼き上げます。貯蔵を目的とした水甕や酒甕などが主です。一方、上焼は釉薬をかけ約1,200°Cで焼き上げます。碗や皿、酒器などが作られます。

